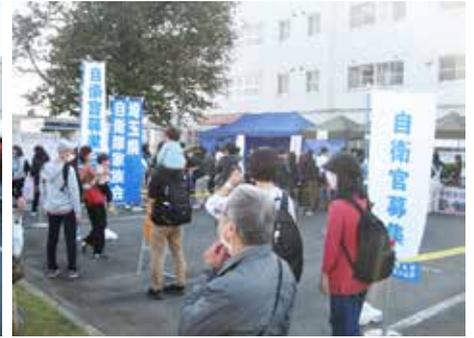




「入間航空祭2022」に募集ブースで参加



埼玉地方協力本部（本部長 高田一空佐）は、令和4年11月3日（木）「入間航空祭2022」において募集ブースを開設した。

入間基地の航空祭は2019年以来3年ぶりの開催となり、例年とは異なり人数制限及び時間短縮の中、一般応募及び招待者の約27000名が、雲ひとつない秋晴れの下、久しぶりの入間航空祭を楽しんでいた。

今回の航空祭はブルーインパルスの飛行展示はなかったものの、入間基地所在部隊の航空機（CH-47J、U-125、U-680A、T-4、C-1、C-2、U-4）の展示飛行が行われた。その中でそれぞれラストフライトになったC-1（029号機）とT-4パイロットに対し、消防車からの放水アーチが行われるなど、感動的でひと味違う航空祭となった。

埼玉地本の募集ブースも3年ぶりとなり、当時を知る広報官も少ない中、たくさんの方に足を運んでもらえるように看板作成や入間航空祭限定の缶バッジを制作する等、様々なアイデアを出し、準備を万全にして、当日は、募集課長（鳥畑2陸佐）以下27名の隊員及び入間市家族会の3名の計30名にて対応した。

募集ブースは、飛行場地区手前のメイン道路に設置され、VR体験、制服試着、個別相談、アンケート回収及びグッズ配布を実施した。空挺団出身の広報官が空挺降下後の隊員の協力を得て、装具の試着コーナーを開設し、多くの来場者の興味を誘った。それぞれのエリアでは順番を待つ列が長く伸び、1000名を超える観客が来場し大盛況となった。また、巡回広報として埼玉地本マスコミキャラクター「サイポン」とともに広報官も募集ブースから飛び出し、他のイベント会場へ行き自衛隊と埼玉地本をアピールした。「サイポン」は子供達に大人気でたくさん家族が「サイポン」と写真を撮っていた。

埼玉地本は、来年の入間航空祭も自衛隊をアピールできるように、様々なアイデアを出し、さらにパワーアップするとともに、たくさんの方々の笑顔と親しみのある広報に努め、募集対象者情報の獲得につなげていく。

